漱石論集

江苏工业学院图书馆
藏书章

藤淳

新潮社

漱石論集

平成四年四月十七日　発行

著者　江藤淳

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一

電話　業務〇三(三二六六)五一一一
編集〇三(三二六六)五四一一　振替東京四―八〇八

印刷所　錦明印刷株式会社

製本所　大口製本印刷株式会社

© Jun Eto 1992, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-303308-8 C0091

価格はカバーに表示してあります。

漱石論集 * 目次

I

『それから』と『心』 8
i「鈴蘭」と「白百合」――『それから』の世界――
ii『心』における光と闇
漱石――『心』以後 104
漱石と中国思想――『心』『道草』と荀子、老子―― 126
漱石、光と影のモチーフ〔インタヴュー〕 168
明治の青春と明治の終焉 漱石――『三四郎』と『心』 185
〔対談 江藤淳・小島信夫〕

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

II

漱石とアーサー王伝説　序説　214
アヴァロンのアーサー　230
薤露のうた――考証と批評のあいだ――
〔対談　江藤淳・三好行雄〕　234
漱石書簡をめぐって　270
〔座談会　江藤淳・中島国彦・紅野敏郎〕
漾虚集解説　305
物語と小説と　316
あとがき　332

漱石論集

I

『それから』と『心』

i 「鈴蘭」と「白百合」――『それから』の世界――

一 世紀末の感受性

『それから』が、東京大阪の両「朝日新聞」に連載されたのは、明治四十二年（一九〇九）六月二十七日から同年十月十四日にかけてである。この小説を執筆するために、漱石は同年五月三十一日から八月十四日まで、七十六日間の日時をかけたと、小宮豊隆は述べている。当時漱石は、数え年で四十三歳になっていた。

ところで、漱石が『それから』の執筆にとりかかるちょうど一年前の明治四十一年（一九〇八）五月、漱石山房からほど遠からぬ牛込北山伏町に住んでいた一人の若い詩人が、俗謡調の四行詩をつくり、翌年三月に自費出版した処女詩集のなかに収めた。詩人の名は北原白秋、詩の題名は「空に真赤な」、詩集はいうまでもなく『邪宗門』である。

当時白秋は二十五歳、すでに与謝野鉄幹の新詩社を脱退して、鷗外の主宰する観潮楼歌会の常

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

連となり、詩友のなかで重きをなしはじめていた。その四行詩とは、こういう詩である。

空に真赤な雲のいろ。
玻璃(はり)に真赤な酒のいろ。
なんでこの身が悲しかろ。
空に真赤な雲のいろ。

明治四十一年の暮に、「パンの会」を結成して、新世代の芸術運動を開始しようとした白秋、木下杢太郎、吉井勇らの二十代の詩人たちは、会合して酔余興を催すと、この詩にラッパ節の節をつけて高唱するのをつねとしたという。

ラッパ節が、明治三十八年（一九〇五）頃に流行した座敷唄であることは、つけ加えるまでもない。その文句は、本来もっと俗なもので、

〈畳たたいて　こちの人
恪気(りんき)でいうのじゃ　なけれども
一人でさしたる　傘ならば
片袖濡れよう　はずはない
トコトットット

というような遊蕩的気分に充ちているが、おそらく白秋とその詩友たちは、「テッテケテッテ、トコトット」というラッパ節の単調な節まわしで歌われる「空に真赤な」の四行詩に、もっとも端的なかたちに凝縮された時代精神の息吹きを感じていたものと思われる。

その時代精神とは、いわば目的が達成されてしまったあとの虚脱感と安堵感、そしてそのなかから必然的に生れずにはいなかった倦怠と哀愁の所産であった。そのにない手は、当然、日清・

日露の両戦役に勝ち、日本に欧米列強と対等の地位をもたらした〝国家有為〟の人々、つまり儒学と社会進化論を支えに精神を形成して来た、明治の建設者の世代ではあり得なかった。

新しい世代は、彼らの末弟や子の世代に属していた。なぜ人は、国のため、家のため、はたまた他人のために〝有用〟でなければならないのだろう？　どうして自分の感情や官能そのものが、生きる目的になってはいけないのだろう？　いずれにせよ、幕末・明治維新以来、先行する世代が高く掲げて来た国家目標は、とうに達成されてしまっているではないか。その上に今更、なにをつけ加えることができるだろう。偉大な明治の太陽は、すでに水平線に没しかけ、その残照のみが西の空に浮ぶ雲を赤く彩っている。……

「空に真赤な雲のいろ」。夕焼けの雲を染める赤こそは、こうして明治四十年代初頭に表現を得た、新しい時代精神の色にほかならなかった。新しい時代は、この残照を仰ぎながら、「玻璃」の高価な杯に、西洋渡来の「真赤な」美酒を注いで、心おきなく酔いしれることすらできた。

「なんで」この充足した若者たちに、「悲し」むべきことがあろう？　にもかかわらずそう自問すればするほど、悲哀と憂愁は「この身」ひとつにいやまさり、とどまるところを知らない。なぜならこの充足は目的喪失の裏側に過ぎず、自己目的化した「この身」は癒すすべのない霊肉の渇きに責めさいなまれずにはいられないから。

こうして、倦怠と哀愁に溺れながら、茫然と窓外に眼を移すと、夕焼けの空にふたたび「真赤な雲」がひろがっているのが見える。しかし、その残照を呑み込むべき闇は、もうすぐそこまで近づいてきている。そのことを誰しもが感じているが、だからといってどうすることができよう。さらにまた「玻璃」の杯に「真赤な酒」を注いで、ひたすらに酔う以外には。

漱石はいうまでもなく、この新世代に属してはいなかった。彼と白秋のあいだには、十八歳の年齢の隔りがあり、白秋は漱石がロンドン留学に出発した明治三十三年（一九〇〇）には、いまだ十六歳の伝習館中学の生徒にすぎなかった。

少なくともその意識の上で、漱石が典型的な明治の第一世代の一人であったことは、疑うべき余地がない。彼はおそらく終生、明治七年（一八七四）浅草寿町の戸田学校に入学して間もなく習った『小学読本』巻一の、

人に、賢きものと、愚なるものとあるは、多く学ぶと学ばざるとに、由りてなり、賢きものは、世に用ゐられて、愚なるものは、人に捨てらるゝこと、常の道なれば、幼稚のときより、能く学びて、賢きものとなり、必無用の人と、なることなかれ、

という教訓が、頭の隅のどこかしらに鳴りつづけるのを感じていたにちがいない。

この「必無用の人と、なることなかれ」という時代の強い要請は、漱石が大学を去り、東京朝日新聞社に入社して、職業作家になったのちでさえも、一瞬もその心を去ることがなかった。現に朝日入社直後、明治四十年（一九〇七）四月に東京美術学校文学会で行った講演、『文芸の哲学的基礎』のなかで、漱石は次のように述べている。

世の中では芸術家とか文学家とか云ふものを閑人（ひまじん）と号して、何か入らざる事でもして居るもの、様に考へて居ます。実を云ふと芸術家よりも文学家よりも入らぬ事をして居る人間はいくらでもあるのです。朝から晩迄車を飛ばせて馳け廻つて居る連中のうちで、文学者や芸術家よりも入らざる事をして居る連中がいくらあるか知れません。自分丈が国家有用の材だ抔と己惚れて急がしげに生存上十人前位の権利があるかの如く振舞つても到底駄目なのです。彼等の有用とか無用とか云ふ意味は極めて幼稚な意味で云ふのですから駄目であります。怒

るなら、怒つてもよろしい、いくら怒つても駄目であります。怒るのは理窟が分らんから怒るのです。（略）――私抔も学校をやめて、縁側にごろ〳〵昼寝をして居ると云つて、友達がみんな笑ひます。――笑ふのぢやない、実は羨ましいのかも知れません。――成る程昼寝は致します。昼寝ばかりではない、朝寝も宵寝も致します。然し寝ながらにして、えらい理想でも実現する方法を考へたら、二六時中車を飛ばして電車と競争して居る国家有用の才よりえらいかも知れない。（略）文芸家は閑が必要かも知れませんが、閑人ぢやありません。ひま人と云ふのは世の中に貢献する事の出来ない人を云ふのです。如何に生きて然るべきかの解釈を与へて、平民に生存の意義を教へる事の出来ない人を云ふのです。かう云ふ人は肩で呼吸をして働いて居たつて閑人です、文芸家はいくら縁側に昼寝をして居たつて閑人ぢやない。文芸家のひまとのらくら華族や、づぼら金持のひまと一所にされちや大変だ。だから芸術家が自分を閑人と考へる様ぢや、自分で自分の天職を抛つ様なもので、御天道様に済まない事になります。

ここでの漱石の語気は、むしろ異常なほど激しいといわなければならない。それほど〝有用の人〟たらんとしたという意味で、彼は明らかに明治の第一世代の価値観を、このときもなお生きつづけていたのである。

しかし、漱石の感受性は、実はこの自覚され、意識された価値観を、知らず知らずのうちに裏切ることのできるものであった。しかもこの感受性は、明治三十三年（一九〇〇）秋から明治三十五年（一九〇二）冬までの二年有余に及ぶロンドン留学のあいだに、ヨーロッパの世紀末に直接触れたことのある感受性であった。

そればかりではない。漱石は、あくまで「国家有為の材」となるために、「洋文学の隊長」を

志した目的意識が、英国の現実に触れてあえなく崩壊した失墜感と喪失感のただなかで、ヨーロッパの世紀末を体験していた。それは、いうまでもなく、産業革命がヨーロッパにもたらした有史以来の社会経済生活上の大変化が、成熟期に到達した時代である。つまり、漱石は、十八世紀末以来奔流した急速な時の流れがにわかに澱み、停滞し、循環しつづける世紀末の憂愁の味わいを、すでにその舌の上に味わった人であった。

意識下に潜むこの豊かな感受性――世紀末の気分に感応し、無用の世界、美の世界、官能の世界に奔出しようとする感受性と、そのような感受性の存在そのものを、自ら悪と感じずにはいられない意識との葛藤は、漱石の創作の世界をいつも多少とも特徴づけていたが、なかんずく『それから』には、その内面の葛藤がもっとも印象的なかたちで表現されている。

漱石がこの小説で、たとえば北原白秋が属し、谷崎潤一郎や武者小路実篤や斎藤茂吉が属していた新しい世代の研究を試みようとしたことは、よく知られた事実である。だが、漱石は、同時にこの小説で、彼の内面がひそかに新世代と共有していた世紀末的感受性の研究をも試みようとしていた。彼と新しい世代とを結びつける感覚上の共通項は、いうまでもなく〝赤〟という色彩である。換言すれば、『それから』は、なによりもまず〝赤〟の研究として読まれなければならぬ小説である。

二　バチュラー代助

漱石は、小説のなかを循環する時間、つまり季節の推移にきわめて敏感で、かつそれを巧妙に使った作家である。『それから』の場合でも、早春から七月末と思しき酷暑の夏にいたる季節の

推移は、プロットの展開にほとんど運命的な不可逆性をあたえている。

もとより登場人物たちは、この循環する時間のなかを、それぞれの生の軌跡を残しながら、いわば直接的に通りすぎて行く。しかし彼らの個人的な時間は、どのような場合であれ、決して循環する季節の必然的な推移を超えることができない。早春から桜の季節に移り、初夏になり、梅雨時になり、蟻が縁側の上にはい上る季節に入り、カッと照りつける盛夏が到来するという物語のなかを流れる四季の運行を、代助も三千代も、決して停止させることはできない。

その意味で、『それから』が、冬から早春への移り変りを象徴する八重椿の描写からはじまっているのは、充分に暗示的である。

枕元を見ると、八重の椿が一輪畳の上に落ちてゐる。代助は昨夕床の中で慥かに此花の落ちる音を聞いた。彼の耳には、それが護謨毬を天井裏から投げ付けた程に響いた。夜が更けて、四隣が静かな所為かとも思つたが、念のため、右の手を心臓の上に載せて、肋のはづれに正しく中る血の音を確かめながら眠に就いた。(一)

この八重椿が「赤い」とは、漱石はどこにも書いていない。しかし、それはやはり赤い椿でなければならぬように思われる。眼覚めた代助は、間もなく「血」についての想念にとり憑かれるからである。

しばらくのあいだ、茫然として、「赤ん坊の頭程もある大きな花の色」を見詰めていた彼は、自分の心臓の鼓動を意識しはじめる。この心臓という「血を盛る袋が、時を盛る袋の用を兼ねなかつたら、如何に自分は気楽だらう」と思いながら、代助が枕元の新聞を取り上げて、「大きく左右に開く」と、そこには「男が女を斬つてゐる絵」が掲げられている。……

このような「血」の想念を導入する椿は、どうしても赤い椿でなければならない。この八重椿

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com